

## 試験研究成果普及情報

部門	果樹	対象	普及
課題名:三倍体を利用した種子なしビワの作出技術			
[要約] 三倍体を利用した種子なしビワはジベレリン200ppmとホルクロールフェニユロン20ppmの混用液に、1回目は開花前1～7日の花房を、2回目は1回目処理の35～60日後に幼果を浸漬処理することにより作出できる。			
キーワード(専門区分)栽培 (研究対象)果樹類-ビワ (フリーキーワード)三倍体、種子なしビワ、ジベレリン、フルメット、 ホルクロールフェニユロン、植物生長調節剤			
実施機関名(主 査) 農業総合研究センター 暖地園芸研究所 果樹研究室 (協力機関) (実施期間)7 年度～ 13 年度			

### [目的及び背景]

ビワの種子は果実の約20%を占めていて、食べる側にとっては煩わしい存在であり、消費者からは種子をなくす技術開発が望まれていた。そこで、種子のできない性質のある三倍体を利用して種子なしビワを作出する技術を開発する。

### [成果内容]

- 三倍体ビワの花は、通常、開花終了後にほとんどが落花してしまうので結実しない。しかし、花蕾を植物生育調節剤で処理すると、種子のないままで着果・肥大し、種子なし果実を得ることができる。
- 植物生長調節剤としてはジベレリン200ppmとホルクロールフェニユロン(商品名:フルメット)20ppmを混用して2回処理する。1回目は開花前1～7日に花房を浸漬処理し、2回目は1回目処理から35～60日後に幼果を浸漬処理する(図2)。
- 最低気温5℃以上の加温施設栽培において、安定した着果・肥大性が確保され、種子あり果実と同等の食味の良い果実が得られた。

### [留意事項]

- 加温施設で栽培する。
- 植物生長調節剤を処理しやすいように低樹高に仕立てる。

[普及対象地域] ビワ栽培地域

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

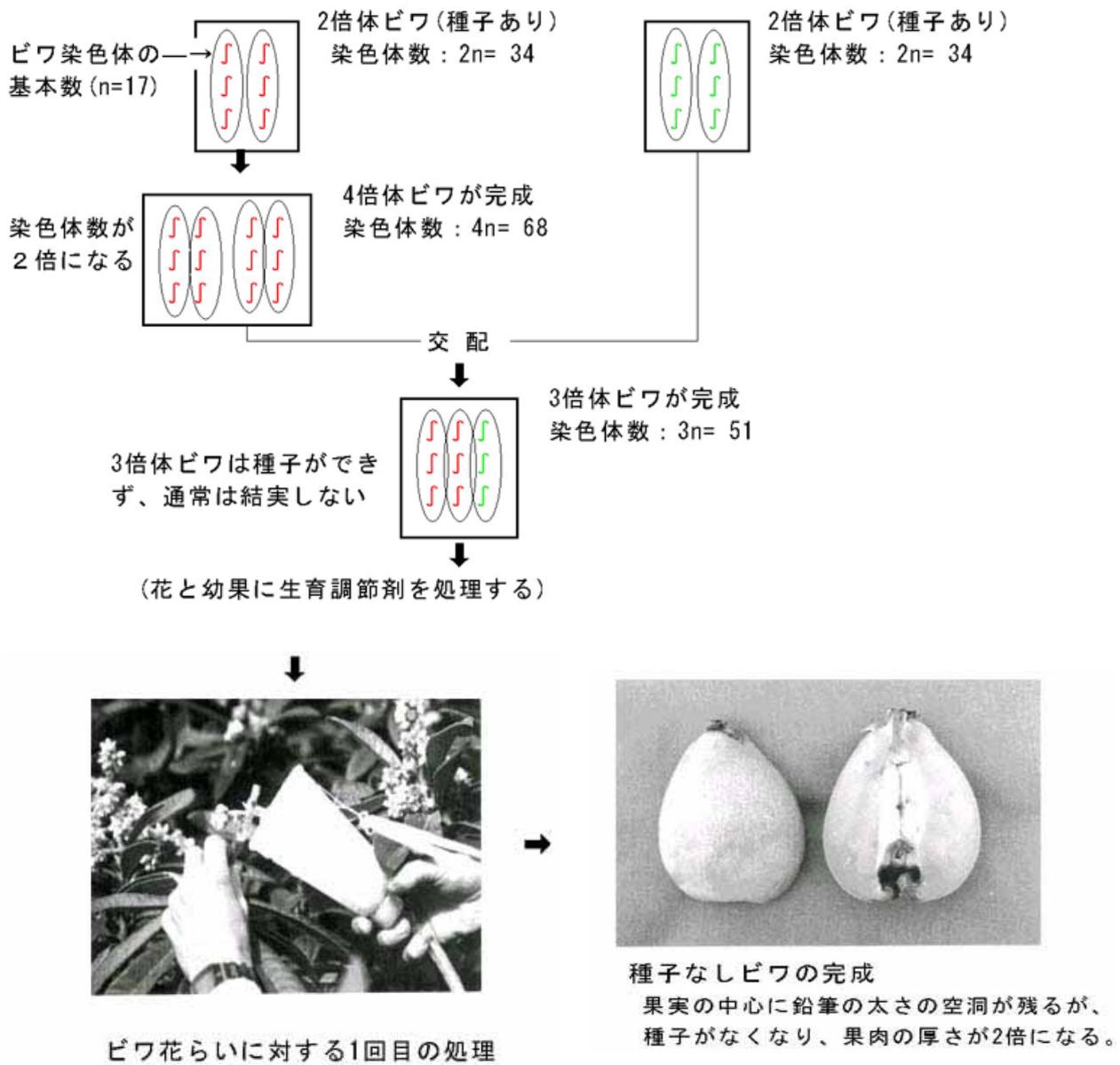


図1 種子なしビワができるまでの過程

[発表及び関連文献]

- 平成9年度暖地園試果樹試験成績
- 平成10年度暖地園試果樹試験成績
- 平成10年度園芸学会口頭発表